

(日本語訳)

0. ヒットラーが1933年1月30日に国家権力を掌握したときには、既存の労働運動に理解があるかに思われた。5月1日のメイデーを祝日としたからである。ところが次の日の5月2日に突撃隊(SA)と親衛隊(SS)が労働組合の事務所を急襲して、労働団体はナチス党とその傘下にある「ドイツ労働戦線」(DA)の指揮下にあるものを除き、壊滅する。同年11月27日にはDAの組織内に「歓喜力行団」(KdF)が設立された。

この襲撃から1年後、ナチス党の幹部で余暇活動を担当することになったロバート・ライは新しく建造された2隻の豪華客船の内の1隻に乗船して、労働者が海外で休暇を楽しむことができる新しい時代の到来を祝った。そしてさらに2年後の1936年5月2日にライはバルト海、リューゲン島のプロウラ湾である施設の礎石を置いた。この時の計画ではこれは世界最大の海浜リゾート施設になるはずだった。戦争により計画は中断され、残された建物は東独時代には軍事施設として、また今日ではユース・ホステルや記念館として使用されている。

1. 「モダン・タイムス」

1936年のチャップリンの映画「モダン・タイムス」は世界中で知られている。ある工場労働者が高速化するベルト・コンベアーでの作業についていかれなくなる悲喜劇である。

合理化は当時、大きな問題となっていた。マックス・ウェーバーは合理化を宿命として捉えた。テイラーやフォードは合理化を人類の幸福を実現する手段だと見なした。共産主義者グラムシも合理化の中に人類の祝福を見ている。

しかし合理化の議論は実は18世紀半ばまで遡ることができる。当時の思潮である啓蒙主義とロマン主義は近代という同じ硬貨の裏表の関係にある。啓蒙主義は自然を支配するために合理化を擁護し、それに反発したロマン主義は「エデンの園」を夢見た。こうして形成された合理化という概念は今日まで4つの意味に使われてきた。1. 効率を追求するという普遍的な原則としての合理化 2. 西洋の理念としての合理化 3. 技術的な、或いは経済的な意味における合理化、例えば工場における作業の合理化、人間工学の発展など 4. 心理学的な意味での合理化

最も一般的な意味として普及しているのは3番目の意味の合理化であろう。この意味でフォード主義(フォーディズム)やテイラー主義が生まれた。とりわけフォード主義は大量消費や社会工学を生み出す「白い革命」と呼ばれる。その基本の思想は脱コンテクスト化と再結合である。伝統や隠れた意味を持つ意味生成の過程が溶解して、単なる関係性の枠組みだけが残った。世界で最初のベルト・コンベアーはアメリカの銃製造工場と食肉加工場に設置された。1913年にはヘンリー・フォードの車工場と同様の生産が始まる。フォード主義は生産を自動化しただけではなく思考も自動化していく。ナチスが1936年に発明した「休日機械」もこの連関において評価をすべきであろう。

2. 「歓喜力行団」(KdF)

1934年2月にKdFの旅行業務が始まる。ナチス党の幹部だったライは当然ながら共産主義に反対だったが、合理化の危険も指摘していた。近代社会における労働は合理化のために、仕事の喜びをもたらすどころか、緊張のための疲労が危険要因として新たに加わったからである。これに対する対策としては余暇の時間を十分にとり、かつその時間は正当な方法で使用されなければならない。KdFにおいても最初から旅行が重視されていたわけではない。むしろ当初は仕事が終わってからの時間や週末を埋める活動が重視された。酔ポート、劇場、映画、カバレット、古典音楽・大衆音楽、フォークダンス、夜間学校などのプログラムである。しかしすぐにKdFの中で旅行部門が最も重視されるようになった。1937年までは拡大し続け、15歳以上の人口の5分の1近くがKdFの旅行を予約した。第二次世界大戦勃発までに約800万件のKdFのパッケージツアーが販売された。そしてそのうち10分の1はKdF所有のクルーズ船による旅行である。4500万人以上がKdFを使って出かけたことになる。

3. 実行型社会主義

フォード主義をナチスのバージョンにしたものが「実行型社会主義」である。ナチス党の国家社会主義は労働者の生活水準を上昇させた。失業率は下がり、人手不足が問題になった。しかし実行型社会主義は文化的な使命も帯びていた。政府は贅沢とされてきた商品の値段を下げる努力を続けた。規格化された大量生産により、冷蔵庫、カメラ(「フォルクス・カメラ」)、ラジオ(「フォルクス・受信機」)、車(「フォルクス・ワーゲン」)そして旅行商品を生産した。

旅行に行かれることは労働者の賃金上昇を抑え、市民権・社会権の喪失の代替となった。KdFには以下のような役割が期待された。1) 労働者の心をつかむ 2) 消費の管理 3) 大恐慌により停滞してきた旅行業界を後押し 4) ドイツへの祖国愛を育成 5) 保養により労働力の確保 6) ナチス党の左翼活動家のガス抜き 7) ナチス党への忠実な信奉者へのご褒美 8) 外国に対する宣伝

実際、1936年の第2回「余暇のレクリエーションの世界会議」はドイツで開かれ、61カ国から3000人の代表が参加した。

4. 「2万人のための海浜リゾート」

労働者のために旅行代金を安く設定したことは新たな問題も生じさせた。まず、未熟練労働者(低賃金)はこのような措置をとっても旅行に出かけられるまでの余裕を持たなかった。次に従来のリゾート地から富裕層の滞在客が減ったことで旅行業界が苦情を申し立てた。KdFは旅行客を東部バイエルンのようなまだ未開拓の観光地へと誘導した。そしてついにはバルト海沿岸にKdF独自のリゾート地建設の計画が持ち上がったのである。5つの計画を実施するためのパイロット・ケースとしてリュウゲン島のリゾート地の建設が始まった。近代的な娯楽センターとして、海水浴以外にも

劇場、映画館、ボーリング場、人口の波のあるプールなど、そして2次の施設として、駅、5000台を収容できる地下の駐車場、2000人の従業員を収容する宿舎、病院、発電所、食肉加工場などを含み、1940年に開業予定だった。

5. 「石は語る」

この計画はドイツ外でも評判を呼んだ。1937年のパリ万博で建築の部門でグラン・プリを受賞する。当時の近代建築の思想もまたフォード主義であるといつてよいであろう。「同じパーツを並べよ」が都市計画や建築家の内の近代主義者の合言葉となり、ル・コルビジェが主導した「アテネ憲章」（1933年）に結実した。機械のように見える構造はもはや「機械の怪物」ではなく、機能的であることが同時に美しいことと見なされるようになった。リューゲン島のプローラ湾に出現したリゾートの建設者は美しい機械を志向したのである。

戦争中は爆撃を受け、戦後はこの「アーリア」の施設に強制収容所から解放された人々が一時期、収容された。1950年以降は東独の国防軍が使用したため、一般人は立ち入り禁止の地区となった。

6. 結論

6.1. プローラ湾は何を象徴しているか

戦後の海浜リゾートはプローラよりもっと大きな「休日巨大工場」を作った。例えば、スペインのベニドルム海岸は6万人の宿泊施設を擁する居住機械である。

6.2 「新生活様式」

歓喜力行団（KdF）はドイツの旅行市場の10%のシェアを有し、大成功をおさめた。しかし格安のパッケージツアーの流行はドイツに限られたわけではなかった。イギリスではウィリアム・バトリンが1936年にホリデー・キャンプを始めた。3年後には3万人が200以上のキャンプ場でキャンプを楽しみ、その最大のものは5000人を収容できる広さだった。フランスでは人民戦線の政府が1936年に労働者に有給休暇を認め、鉄道運賃を下げた。